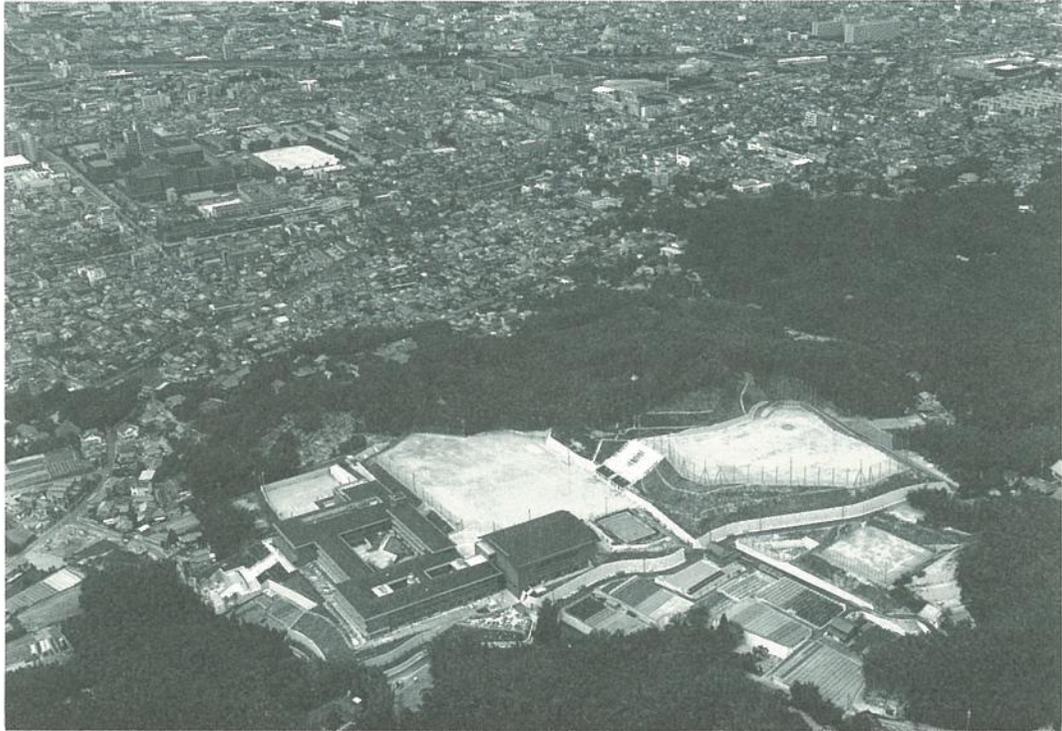


ARPA・K NEWS LETTER 地域計画・建築研究所



立命館中学・高等学校移転
新築の全景

アルパック ニュースレター もくじ

・ 学研都市 10年 - その1 -	2
・ 技術と地方の自立(上)	3
・ 家庭からみたディスポザー	5
・ 手弁当の会『SAS九州』ネットワーク通信⑤	6
・ 国際レジャー博のテーマって何	8
・ 「ブルーグラスフェスティバル」を楽しんでいます	9
・ 複合的街づくりをみる	10
・ 東京事務所開設パーティ	11
・ 新人紹介	12
・ うまいもの通信④ 蒜山のキノコ	13
・ 旧刊新刊書評紹介「リゾートビジネス」	14
「地域計画への人間的視角」	15
・ まちかど	16

NO.32

学研都市 10 年 — その 1 奥田先生と語る —

三輪 泰司

9月号から3～4回の予定で始めるつもりでした。7月に久しぶりでヨーロッパへ行きましたら、その後がたいへんでした。ミュンヘンから送った資料類は、未だに荷作りを解かないまま、社長室に積まれています。

「学研都市」もどンドン動いています。

9月17日 — くしくも「関西学術研究都市調査懇談会—奥田懇」の発会10年目の日 — 都市問題会議東西合同シンポジウムに先立って、京阪奈丘陵の学研都市現地視察をしました。東京から石原舜介先生はじめ20名が、お越しになりました。

ご案内しながら、勉強させて頂きました。

あるニュータウンで、デベロッパーの方が“奥田先生の学研都市構想のおかげで、遅れてしまいました”と説明されていました。

なるほど、企業はやはり、そういうふうを受けとめておられるのかと思いました。さしずめ私もとんだジャマモノでしょう。

“やはり”といいましたのは、10年前、この構想にとりかかった時、奥田先生はじめ、「作戦参謀」の会議で、地元の人々はどう感じるだろうか、大地主であるデベロッパーはどう受けとめるだろうか、といったことまで議論しました。いわば社会的なシュミレーションをしました。あらゆる立場の人々の心をよく知り、受け入れてもらえるように、しなければならぬと考えました。

人類の未来への思いから

昭和44年12月、あの激動の時代を経験されて京都大学総長の任期を終え、退官された奥田先生は、しばらく身の整理に時間を費や

しておられました。

丁度その頃、「ローマクラブ」のレポート「成長の限界」が発表されました。人類の未来は、決してバラ色ではない。自然環境の破壊、資源の枯渇、人口増加と食糧生産のアンバランスは人類生存の危機を招きつつある…

我が国は、高度経済成長とその後のオイル・ショックを経験し、文明の進歩とその脆弱さの双方を知っていました。

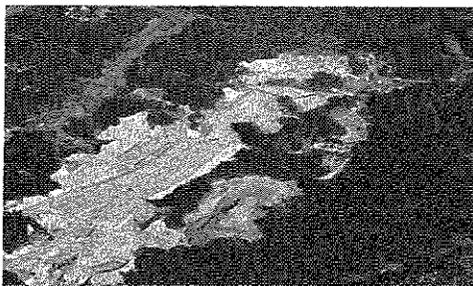
科学者であり、農学者である奥田先生は、ご自身の残りの人生をかけて、何に奉仕すべきかを見つげられました。

先生の次の総長をお務めの、岡本道雄先生らに、思いを話されました。それは、皆さんが心の中に抱いておられたことでありました。学研都市構想の「神代」が始まりました。

この頃、奥田先生は京都東ロータリー・クラブの会員でした。同じクラブにムーンバットの河野卓男社長、それに私も属していました。

この3人、奥田先生が明治38年、河野社長が大正7年、私が昭和6年と、13歳づつ違うのです。当然干支がずれています。社会的なポジションも違えば、専門も違い、性格と発想も違っています。そこで何かが合い、始まるのです。

(みわ ひろし)



寄稿

技術と地方の自立(上)

齋藤 周久

先日、当社のOBで現在長野で電気・コンピュータ関係の会社に勤めておられる齋藤周久さんら、お便りをちょうだいしました。日本の技術水準の問題と地方の自立という問題について、大変示唆に富んだ内容ですので、ここに紹介させていただきます。

なお、紙幅の関係で編集者の責任で、省略させていただきました。

信州における産業をみると、大手の電機関連産業の地方工場を除くと建設、印刷業といった比較的地域性の強い産業と大都市で作られ専らその販売を分担する自動車関連産業などが多い。いわゆる「地方」の共通しているところと思われる。

加工貿易立国である日本の場合、原材料の輸入にとって都合の良い太平洋岸を中心に産業と技術が集中し、地方は総じて人材提供の場となってきたといわれる。したがって、これまで地方の活性化というと、地場産業の振興を試みながら大都市からの工場誘致を図り、若年層の流出をいかに抑えるかがポイントになってきたように思われる。

大都市における過密化による弊害が顕著となる一方、高速交通網の整備計画が具体化したことに伴い、一時期、「地方の時代」と期待が寄せられたが、結果的には東京圏への一点集中がますます進むにすぎなかった。

こうした中央と地方との関係は、国内にとどまらず少し視角を広げると、今日ではわが国そのものが米国の一つの州にくみこまれ、ある意味では日本そのものが米国の下請け部品工場となっているという見方さえ出

きている。(『日経ビジネス』1985年5月号)

こうした、重層的な視点にたつて地方の活性化と産業、技術について少し考えてみたい。

日本の技術水準を論ずる場合、日本の国際競争力の強さ、日本の生産量を技術水準の高さと考え、展開している場合が少なくない。すなわち、基礎技術開発力においては欧米先進諸国には劣るとしながらも「品質管理技術」「製造技術」「生産技術」等の分野での優越性を展開し国際競争力の強さを説明しようというものである。なお、最近、基礎技術開発力についても「特許件数」や「論文発表件数」といった指標で、欧米との較差が縮小、ないしは凌駕しているといった意見もみられるようになった。しかし、これを疑問視する意見も少なくない。

まず「品質管理技術」について言えば、わが国の強さとは良い部品を選別する「技術」ではないかとさえ思う。もともと日本の場合、パーツ(部品)は下請けに出すシステムになっている。NC機器が意外にも下請け零細企業に多く導入されているのも、こうした関係によるもので日本の特徴ともなっている。さらに驚くべきことは、機械の持つ能力以上の精度を要求される場合も多く、機械のメーターの目盛と目盛の間を狙いすまして加工するといったことまで行い、まさに技術というよりは技能というのが正しい。しかも加工したものが図面通りのものかを測定したり、「選別」するという測定技術については、これまた欧米の測定器に頼るといったケースが少なくない。日本の場合、親会社はアセンブリ(組

立)だけを行う形態が多く、こうして選りすぐった材料、部品を使用して完成品の不良率の少なさを強調しているのが現実である。さらに「QC活動」と称され日本の品質管理の代名詞とされている集団活動にも疑問が多い。「欧米はシステムそのものを改善しようとするが日本は無駄な時間をさがしてはなくそうとする」(マッキンゼー日本支社)、「何干という提案が出されるが、そうなるとシステムそのものが疑わしいのではないか」(『幻想の繁栄・ニッポン』ジョン・ウォルノフ)、「こうした活動が所定時間外に行われたり、無報酬という日本の方法をヨーロッパに導入するわけにはいかない。わが国は19世紀の会社ではなく20世紀の会社ですからね」(『幻想の一流技術国ニッポン』(内橋 克人))という意見さえある。メディア・ゼネラルとAP通信共同調査によると「一般的に米国製品より日本製品の方が品質が良いか」という質問に米国人の52%が「ノー」と答えている。(1987年6月16日 毎日新聞)従って、昨今の円高で、米国における日本製品の価格があげられたら日本製品を買わないとする米国での世論調査も少なくない。まさに値上げもままならない状況といえよう。

次に「生産技術」であるが、これについても今日の製造業の生産性の伸び率の高さをもって優位性を論じるケースがかなりあるが、「日本の技術水準が欧米にキャッチアップしたと思われるようになったのも主に米国からの技術導入が飛躍的に増加したときと一致している」(『戦後の日本の技術革新』中村 静治)したがって高い伸び率はむしろ生産性が低かったことを示すだけにすぎないといえよう。実際、1984年度日本生産性本部の調査では「日本が米国を上回る製造業種は21種中4業種(石油・石炭製品、鉄鋼、電機機械、化

学)だけ、日本の製造業は一般にいわれているほど強くないということだ」としている。(1987年6月19日『朝日新聞』録原生産性研究所長)わが国で優れている産業の代表格とされる自動車産業でさえ、現時点では米国の方が生産性が高いとのべている。

次に「製造技術」の点にふれると、トランジスタラジオの商品化の成功などから改良技術、商品化技術の優越性をあげ、いわゆる「基礎より応用」といった見方があるが、今日のように趣向の多様化、ライフサイクルの短縮化傾向などを考えると、この点に優越性の根拠を求めてよいものかどうか疑問である。今日では、技術の陳腐化をさける意味からも積極的に「基本技術」を提供しロイヤリティを得たほうが得策であるという傾向にある。これが現在、「知的所有権」として米国が強力な保護の網をかぶせようとする動きをあらわしているといえよう。

また、基礎技術の充実ぶりを「特許件数」をもって説明しようとするむきもある(1988年6月16日『読売新聞』)が、単に件数では、それぞれの登録方法などに大きな相違があるため説得性に欠けよう。「日本の特許申請は狭い球場でホームランを連発するようなもの」(1987年1月12日『日本経済新聞』)という点を無視できないからである。(つづく)

(さいとう かねひさ)

家庭からみたディスポージャー

小泉 春洋

ディスポージャーは行政内(下水道)では嫌われ物である。しかし、都市部のマンションではかなり使われるようになってきているようで、あるディスポージャー販売会社の話では、関西の各マンションに1世帯はディスポージャーを使用するまでになっているようだ。

ディスポージャーの普及が下水道に与える影響は大きいと言われ、下水道部局では使用禁止・抑制指導で対応しているのが現状である。しかし、家庭の主婦に対してはキッチン革命を呼び起こす要素もあり、今すぐに飛躍的な

普及はないとしても今後使用家庭は徐々に増え、将来にわたって禁止・抑制では済まない問題である。

さて、最近のディスポージャーは図1に示すような構造で、重さも軽く(約4kg)、アタッチメントによりどんな流し台にも簡単に取付けられ、中に異物が詰まっても簡単に取り出せるなど機能が向上している。さらに、販売業者も24時間メンテナンスなどのサービス体制をとるなど、過去に粗悪な製品が販売されたころと大きく変わっている。なお、価

表1 ディスポージャーのメリット

生ごみの処理がなくなり食事の跡片付けが早く・案に終わるようになった	13	34.2	↑ 跡片付けが楽
三角コーナーや流し台のごみ取りかごの掃除がなくなった	3	7.9	
流し台のぬめりがなくなった	5	13.2	↓ ↑ 広く
三角コーナーが不要で流しが広く使える	8	21.1	
生ごみのごみ箱が不要で台所が広く使える	2	5.3	↓ ↑ 悪臭
生ごみの悪臭がなくなった	18	47.4	
ごみ箱の汚れや悪臭がなくなった	5	13.2	↑ 清潔
流し台に生ごみがなくなり流しが清潔になった(ゴキブリが出なくなった)	8	21.1	
水切りがなくなった(水切り用袋が不要となった)	2	5.3	↓ ↑ ごみ処理
生ごみがなくなりごみからの水もれが気にならなくなった	2	5.3	
生ごみの量がなくなり、ごみの量が減り軽くなった	11	28.9	↓
生ごみがなくなり、ごみ収集日が気にならなくなった	2	5.3	
その他(油を流せるので便利、細かいご飯粒も流せるので便利)	2	5.3	
改善点無し	1	2.6	
回答者合計	38	100.0	

図1 流し台に取付けたディスポージャー

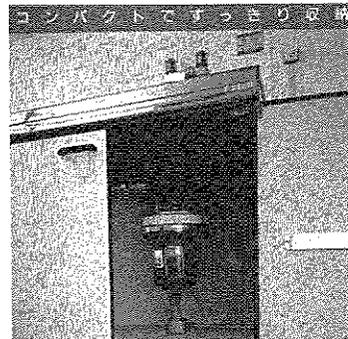


表2 ディスポージャーの問題点

音が気になる(ややも気になるも含む)	12	31.6
振動が気になる(ややも気になるも含む)	6	15.8
入口が狭い(スイカの皮等大きなものは切っていれなくてはならない)	4	10.5
排水管の臭いが気になる	2	5.3
その他(コーヒーのフィルター等を分けなくてはならない)	1	2.6
問題点無し	18	47.4
回答者合計	38	100.0

格は取付工事費等を含め約14万円であり、維持費は電気代等で月約40円である。

実際にディスポーザーを使用している家庭の声をある販売会社のアンケート結果から捨ってみると、①生ごみ特有の悪臭から開放された、②食後の跡片付けが楽になった、③階下のごみ置き場まで重いごみを持ち出さなくてよくなった、④流し台の周りが清潔になり、また、三角コーナーが不要となり流し台が広く使えるようになったなどのメリットがあげられ、問題点として、マンションでの普及が主であることから音の問題があげられている(表1、2参照)。

ディスポーザーの使用は下水道の処理場の負荷を大きくしたり、合流式の下水道では雨天時に下水管にたまったディスポーザーの粉碎食物残さが雨とともに河川に流れ、河川を汚すなどの問題があると指摘されているものの、以上のようなメリットがあるため、今後、ディスポーザーはかなり普及して行くと思

される(十数万円の負担は利用のメリットが納得されれば購入可能な金額と思われる)。

これに対して行政は単なる使用禁止で対処するのではなく、①下水道未整備地域のディスポーザー使用家庭には合併浄化槽設置を義務付るとか、②ディスポーザー使用家庭には適切な下水道改善料金を負担してもらうなどの方策を検討する時期にきていると考える。

(こいずみ はるみ)



手弁当の会『S A S九州』

— 大分県大山町訪門記 —

<ネットワーク通信⑤>

伊集院 豊磨

S A S (System Analyst Society) は全国では20年の歴史を持っており、その中でSAS九州は昭和57年に発足し、約6年間の活動を続けています。趣旨は何ですか?とよく聞かれますが、特に規約もなく説明をしにくい会ですが、ヒューマンネットワークをつくりたい人が参加している会です。

S A S九州は会員が約50名で、日常活動は月1回(第三水曜日)の例会と忘年会、総会を行っており、例会ではビールでのどをうるおいながらフリートーキングの場や、講師の方(ex博多にわかの先生等)をお招きしての

ミニ座談会を行っています。

昭和61年には、大分県湯布院でS A Sの全国大会を開催し、約200名の方々が参加し、各地での活動を話題に花を咲かせました。今回は村おこしで有名な大分県大山町を7名の会員で訪れ、町の若手職員の方々と議論する機会がありました。

「梅・栗植えてハワイに行こう」

大分県大山町は、大分県がすすめている「一村一品運動」のモデルになった町で、年間数千人の人達が全国から視察に訪れる町です。

ここまで到達するには、様々な苦労があ

ったようです。「何もない町？」でどういう過程を経て、今の大山町があるのでしょうか。その点を町の職員の方々にうかがいました。

7つの戦略 — 地域振興 —

第一に、町のトップ（町長）がプロデューサーとして活躍し、町民1人1人に危機感を訴ったえ、その演出をうまくやったことです。精細にデータを整理し、大山のような山村では米作では食えないという結論に達し、町の農業の危機的現状を訴ったえしました。「米を捨てて、果樹を植えよう」、伝来の作物である米をやめて、田に梅や栗を植えようという訳ですからお年寄りの方々にはなかなか受け入れてもらえず、鉾先は次代を担う若い人に向けられ、そこから動きが始まりました。

第二に、コトを起こすにあたっての大きな問題は事業のリスクを誰が負うかです。農家には投資するお金がありません。金があるのは行政だけであり、以後町財政は農業（果樹、やさい等）へ傾斜投資を行っています。

第三は実務家の養成です。1人でやることには限界があります。そこで手初めにやったことが町職員の研修です。毎週金曜日は日常業務をやめて研修会が行われ、町長が講演し、その講演テーマで1週間以内にレポートの提出が義務づけられたそうです。第1回目のテーマが「幸せとは何か」であったという

のが印象的でした。

第四は、ヒューマンネットワークの活用です。橋田寿賀子さんの講演会をやったそうですが、ここでは橋田さんの交友関係と、大山町のネットワークの接点を見つけて、最大限に利用して実現されたとのことでした。

第五は、「大山町のあるべき姿」を描くために、町にはどんな資源があるのか、住んでいる人の考え方はどうか、生活の仕方はどうか、を詳しく分析したとのこと。実証的にビジョンを描くことに力を入れられたようです。

第六に、計画（町の振興プラン）づくりは町民を巻き込んでやったこと。委員会には住民が入り、自分達でつくった計画づくりに取り組んだことです。

第七に、イスラエルのキブツからたくさんのことを学び、実践に生かしていることです。現在も町の若手職員が数ヶ月の期間キブツに研修に行き、現地で生活し、学んで帰ってきたことを実践の場に役立てようとしていることです。このキブツに学んだことは、えのきだけの栽培での分業体制や、町内を8つの文化集積団地（見える範囲、声がとどく範囲、歩いて行ける範囲）に分けて生活施設整備を進めていることに実を結んでいるとのことでした。

全国から注目されている大山町は、地域振興に力を入れて30年の歴史があり、えのきの

大山町職員との座談会



参加メンバーと宿の御主人



里、果樹の里、野菜の里として発展してきました。

収入の面では目標にとどいた大山町では、①生産だけでなく、もうひとつのプラスα(生活のゆとり、週休三日制、文化活動等)を大切に、②外の人が良いと思う「人と自然」を思いきり出した本づくりへの取り組み、③むらに住んでいける条件となる安定した収入と安定した生活ができる条件をつくること等に向けて、新たな段階でのチャレンジが始まっています。

大山町の明日を考えている方々の情熱と若々しいパワーを膚で感じ、帰路につきました。

最後に参加したメンバーの感想を載せてまとめとします。(いじゅういん とよまる)

- 企業経営の厳しさと村おこしの厳しさは共通している。方法は違うけれども……。
- 皆さんの整理された自信たっぷりの話しをお聞きして、相当年季が入っていると思った。
- イスラエルのキブツとの交流、ローカルレベルの国際交流が「原点の原点」であることに興味を持った。
- 「ヒューマンネットワーク」が次の決め手かとの話が出たが、それだけでなく、なんらかの「仕掛け、仕組み」が必要であろうと考えた。
- 明確な理念に裏うちされた大山町の皆さんの情熱を感じ、大変勇気づけられた。
- 公務員はのんびりした人が多いと思っていたが、積極的な発言を聞き、認識を改めなくてはと思った。
- 現地に出向いての1泊というやり方と、ゆっくり時間がとれたことが良かった。

「国際レジャー博のテーマって何」

藤田 武彦

近況にしてはやや時間が経ってしまったが、今年7月中旬にオーストラリアに行ってきました。各地まわりましたが、ここでは国際博覧会でのお話を1つ。

ご存地の方も多いかと思いますが、今年4月から10月にかけて、国際レジャー博がブリスベンで開かれています。14ヶ国が参加しているものですが、当然のことお客さんはオーストラリアの方が大半のようです。

40haの敷地に、参加国のパビリオンが並んでいて日本でも見られる博覧会風景です。しかし、少しちがっていると思ったのは、屋外でのアトラクションが多く、しかも大変な人だけだったことです。写真にもありますダンス(多分ベリーダンスだったのではないでしょうか…)やピエロ、会場内のパレードなどでにぎやかでした。またパビリオンのまわりでも、日本館はお茶席を設けてあり、また隣の Papua New Guinea では外で木製のくり

抜き舟や貝のお金をつくっていました。この Papua New Guinea では貝のお金や舟をつくらしている人がお客さんと話しながら(よく会話はわからなかったですが)和気あいあいといった感じでした。

一方パビリオンの中のようすは、時間の関係で多くは見れませんでした。展示、紹介が行われていました。日本館では、ロボットを使って獅子舞をしていたり、マルチビジョンで四季を表現していました。また隣接の「テクノプラザ」ではロボットが水芸などしていました。手持ちのパンフレットにも「働きバチ、遊びベタととかくレッテルを貼られがちなニッポン人。(中略)長い歴史と伝統に裏付けされた日本人のレジャー心はハイテク王国でも健在のはず。」とありました。

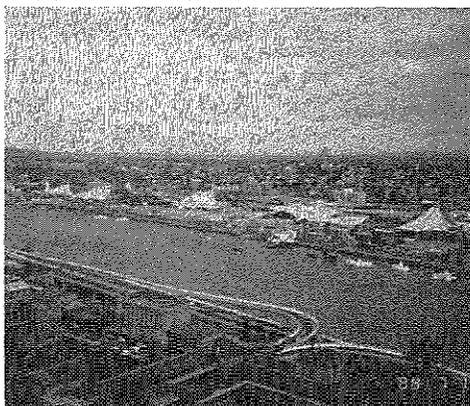
こうした会場風景をみながら、さてこの博覧会のテーマは何だったっけと思ってパンフレットをみると「技術時代におけるレジャー (LEISURE IN THE AGE OF TECHNOLOGY)」とありました。いっしょうけんめいくり舟をつくらしていたおじさんとベリーダンス

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

をしていた女の人そして、ロボットの獅子舞が同時に頭に浮びました。多分日本館などは「技術時代」について忠実にテーマを受けているのだろうと思いましたが、レジャーというのは何だろうとあらためて考えさせられました。

ちなみに、パビリオンにあまり入らなかったのは時間がないためもありましたが、屋外を歩いてアトラクションを見ているのが楽し

国際レジャー博覧会



「ブルーグラスフェスティバル」を楽しんでいます。 福岡 雅子

ブルーグラスという音楽を御存知でしょうか。アメリカの東部アパラチア山脈のあたりで生まれた白人民族音楽です。バンジョー、ギター、フラットマンドリン、フィドル（バイオリンの俗称）、ベース（コントラバス）、ドブロギター（スチールギターのようなもの）という6種類の楽器の一部ないしは全部を用いて4～6人くらいのバンド編成で演奏します。たいへん軽快な音楽で、映画やTVドラマでコミカルな追いかけっこをする場面などのバックによく流れています。残念ながら日本ではあまり知られておらず、プロの演奏家もほとんどいません。実は筆者は学生時代からこの音楽に取り憑かれていまして、現在も

かったためでもあります。また現地の案内をしていただいた人から聞いたところによると、「日本館」「テクノプラザ」は博覧会オープン当初は、人の列でなかなか入れなかったが、今は割合すぐ入れますよとのこと。仮に時間を楽しくすごし、また印象強く思い出を残すことかこの博覧会のテーマであるとする、ダンスやパプアニューギニアの人のことが心に残ります。 (ふじた たけひこ)

アトラクション ーベリ－ダンスー



女性4人のバンドで演奏を続けています。

ところで、ブルーグラス愛好者にとって夏は非常にすばらしいシーズンです。その理由は各地でブルーグラスフェスティバルが開かれること。近ごろジャズフェスティバルもあちこちで開催されているようですが、プロが演奏し、観客はそれを聞きに行くだけのジャズフェスと違ってブルーグラスフェスはみんなトウシロで、参加者全員で手作りのお祭をするのです。ブルーグラスの本場はアメリカでもほとんど同じブルーグラスフェスティバルがあります。5月頃からフェスシーズンが始まって7月8月は毎週末日本のどこかでフェスが行われます。ちなみに、今年のフェスティバル会場は

5/3(日)～4(祭) 小岩井農場(岩手県)

5/14(土)～15(日) 柴田牧場(三田市)

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

- 7/22(金)～24(日) 時山バンガロー村(岐阜県)
- 7/23(土)～24(日) (千葉県)
- 7/30(土)～31(日) まきばの家キャンプ場(池田町)
- 7/30(土)～31(日) エル・パティオ牧場(阿蘇)
- 8/4(木)～7(日) 柴田牧場(三田市)
- 8/20(木)～21(日) 大山フィールドアスレチック広場
- 8/20(土)～21(日) 太宰府天満宮「鬼すべ堂」
- 8/26(金)～28(日) 夕日の滝キャンプ場(箱根)
- 10/1(土)～2(日) 柴田牧場(三田市)

では、ブルーグラスフェスとは何をしてお祭りかをご説明しましょう。ブルーグラスを演奏したり聞いたりすることが好きな連中が集って大自然の中で過ごします。何をしておごすかということ、フェス会場に着いたら真っ先にテントを張りさえすればあとは何をしても良いのです。ステージのプログラムが決まられていて、1バンド15分程度で順番に演奏しますが、自分の出番以外はどこにいてもかまいません。従って、演奏の練習をする者、食事を作る者、食べる者(もちろん野外料理です)、買い出しに出かける者(近くの町や村まで車で食料品などを買いに行きます)、果ては野球を始める者、テニスをする者、夜は花火やカラオケセットまで登場します。要するに普通のキャンプをしていて、時たまブルーグラスのステージを見たり演奏したりするということなのです。そして、一番の楽しみはステージ終了後朝まで続くジャムセッション。

フェスティバルの風景



ョン。大勢でみんなが知っている曲を繰り返し繰り返し演奏します。近ごろは筆者も歳には勝てず、あまり遅くまで起きてられないのですが、テントの中で夢見心地に聞くジャムセッションの音楽はまた格別で、えもいわれぬものです。もしも、ブルーグラスフェスティバルが面白そうだな、自分も行ってみたいなどと思われる方がいらっしゃいましたら、是非ご連絡下さい。自然の中で、陽気な音楽に囲まれて、Keep On The Sunny Side!

(ふくおか まさこ)

複合的街づくりをみる

高橋 光雄

ショッピングセンター等に代表される商業施設づくりにおいても、「街をつくる」とか「時間をかけてつくりあげていく」といった考え方が重視されるとともに、機能の「複合化」が志向されてきています。現在では尼崎市の『つかしん』がその典型として注目されていますが、『つかしん』よりも一歩早く複合的な街づくりを手がけているところが愛知県豊橋市にあります。豊橋市西南部の藤沢地区にある『ホリディ・スクエア』がそれで、ホテルとショッピング施設を核に、スポーツ施設、レストラン、カルチャー施設、サービス施設等を配置したコミュニティゾーンを形成しています。

市郊外の住宅地区となっている藤沢地区がまだ田園地帯であった昭和39年、工場跡地約2万坪を活用してボウリング・スケート・ゴルフ練習場によるスポーツセンターを開設したのを皮切りに、昭和53年はイトーヨーカドーを誘致しショッピングセンターを、昭和56年にはホテルを、昭和60年にはシアター(2館、計610席)を建設するなどして、「点から面へ」の展開を図ってきました。この『ス

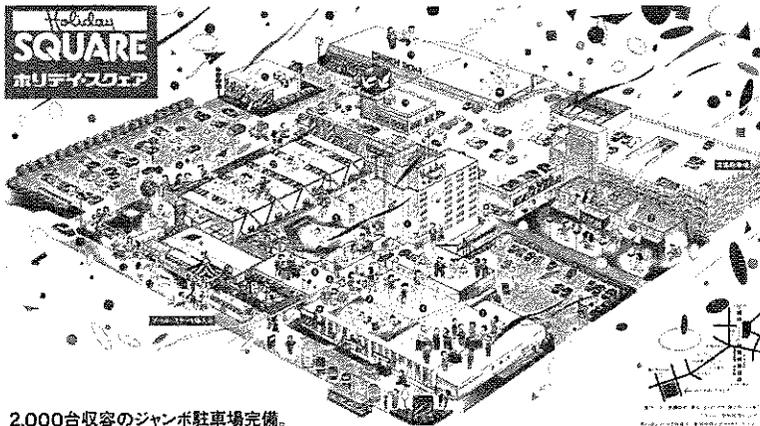
タエア』は、市中心部と豊橋港を結ぶ大崎街道沿いに位置していますが、最近になって『ホリディ・スクエア』前の沿道にも専門店や飲食店、医院等の立地が著しく、いわば門前町を形成してきています。そこで、『ホリディ・スクエア』では、これらの動きを受けて「面から街づくりへ」発展させるべく周辺商店等に呼び掛けて市内でも最大の発展会組織を昭和62年に結成しました。今年の年末には街路樹のライトアップ作戦を計画しているそうです。さらに今後の計画としては、『スクエア』内に高層ホテルホリディタワーを建設し、コンベンション機能を強化することによって豊橋市の新都心づくりを目指しているということです。

このような展開の中で『ホリディ・スクエア』は現在、人口33万人の豊橋市を中心に岡

崎市、浜松市や渥美半島地域におよぶ100万人強の商圏から休日には2万人を超す集客があるそうですが、その要因として2000台近い無料駐車場があげられます。また、周辺商店等の駐車場も合わせると3000台に及ぶとのことですが、豊橋市のような地方都市でのこういった大型施設の立地は、商業構造だけでなく都市構造をも一変してしまうだけの影響力をもっており、それだけに市の都市計画等との調整が今後の課題になるものと思われます。

ちなみに、京都市内の高野地区でも、ホリディ・インを核とするホリディ・スクエア、イズミヤ、銀行や専門店等の立地などによって、自然発生的なものではありますが、豊橋のケースと同様の街づくりが進展しつつあることがうかがわれます。

(たかはし みつまさ)



2,000台収容のジャンボ駐車場完備。

東京事務所開設パーティ 東京事務所一同

去る10月6日、「東京事務所開設記念行事」という、一寸おどろおどろしい名前のものを行いました。趣向は「隅田川の川下り」、アルパックの各地事務所がおみやげに持ち寄った各地のうまいものを楽しんで頂きたいということで、私共アルパック所員の先輩、友人

で東京にいらっしゃる方々にお集まり願ったという次第です。御報告、御紹介しなければいけないことは沢山あるはずですが、余りにも色々面白い話を頂いて、今でもまだ、整理がつかない状態でおりますので、とりとめもなくあれこれ申し上げることにいたします。〈隅田川の川下り〉産経新聞の東京版で、「老舗風土記」という連載をやっていますが、その何回目かに「駒形どぜう」の記事が載り

ました。店内で「江戸文化道場」を開いて数年、9月には「舟遊び」をしようというものでした。舟に乗せてもらおうと連絡を取ってみると満員でダメ。色々教えてもらって舟宿を紹介してもらって、今回の企画になりました。

〈下町の味〉 船宿は浅草吾妻橋の西詰。川畔に連なる隅田公園を漱石よろしく、「此日や天気晴朗とくると一瓢を携へて墨堤に遊ぶ」心地で北へ向かうと「X」型橋の桜橋に至り、これを渡ると、「長命寺の桜餅」屋がむかしからの味を伝えています。「言問団子」「金つば」と下町の味には甘いものが多いようです。

〈全国の珍味〉 船は100人乗ちの大きなものですが、そこに2列に並んだテーブルの上は各地からのおみやげでたちまち一杯になりました。めずらしく、おいしいものが勢揃いした様は、壮観でした。九州からは「かつおの腹皮」、「からしめんたい」、「おきゅうと」等々。大阪からは「さいぼし」、「黒豆の納豆」等々。京都からは「さば寿し」、「鮎巻き」、「漬け物」等々。名古屋からは企画商品「松前づくし(寿し)」等々。北海道からは「毛がに」、「生えび」等々。お酒も、九州の焼酎をはじめ各地の銘酒が持ち込まれました。余り沢山あるものですから、東京からの味は、途中で、ブリキのセミのペケペケなどのおもちゃをなつかしんでもらった他は、皆さんのお帰りのおみやげにまわることにな舟内のつどい



りました。

〈おわりに〉 浜松町あたりまで出て、海側から東京の夜景を垣間見ている約2時間が過ぎました。こうして、私共アルパック東京事務所も船出をすることになりました。

お忙しい中、貴重なお時間を割いて下さった方々、有難うございました。今回おいで願えなかった方々、別の機会に御一緒させて頂くことを楽しみにしております。そして、駆けずり回って応援してくれた各事務所の所員の方々にもお礼申し上げます。

今後とも、引き続いて御指導、御助力、重ねてお願い致します。

ありがとうございました。

新人紹介

花の北海道を旅して

桃園 和徳

8月の後半に入社した桃園です。早いもので、もう2月になります。

入社前に自転車で北海道を一周し、黒々としていたのがすっかりとれてしまいました。今回の旅行は、敦賀経由で舞鶴からフェリーを利用し小樽に上陸、海岸沿いをほぼ時計回りに回りました。帰りは、小樽から新潟へ渡り、富山県高岡市を經由し、五箇庄、白川郷で遊び、旧中仙道宿場町を中心にたどって帰りました。

今年は、例年になく寒かったせいか、エゾカンゾウやジャガイモの花を始めとする5〜7月の花があちこちに咲き、まるでお花畑の中を走っている心地を味わえましたが、その一方では、ほとんどの所で強い向い風に悩まされるという代償を払いました。

北海道のイメージとしては、起伏が少なく広い耕地を持つ所と思っていたものが、いざ現実に足を踏み入れてみると、札幌から旭川に至る地方や道南地方には本州とあまり規模

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

のかわらない水田が多いのには寄異な感じを持ちました。後で聞いたのですが全国一の米作地帯とのこと。風物としては、日本海側でのウニ採取、オホーツク海のカニ採取、知床から日高に至るコンブ採取等が行なわれており、豊かな自然の恵みの一端を垣間見ることができました。

今回の旅行を通して感じたことは、風除け小屋付きバス停が多く、かつまた各市町村にライダーハウスがあり安く泊れ、旅行者をもてなす雰囲気がある等、好条件がそろった所と言えます。あなたもいかがですか。

私の専門分野は、総計や活性化計画等の地域計画部門ですが、他に、情報化、高齢化、国際化等、これらの時代の趨勢を担う方面についても手掛けて行きたいと思っています。最後になりましたが、アルパックの印象は、「昔なつかしい家へ帰った雰囲気」のある会社だと言えます。よろしく願い致します。

(ももぞの かずのり)

うまいもの通信④

蒜山のキノコ

藤田 武彦

「キノコ思い切りたべたいんですけど。それから鯛の麦むしも。」10月近くなるとここ数年^{ひるぜん}いっている岡山県蒜山地域(川上村)のキノコがたべたくなる。少し前から言っておくとなじみの旅館のおじさんが用意してくれる。

「どんなタケ(地元ではキノコをこんな風^{ふう}に呼ぶ。)がとれるかわからんけど来て下さい。」

これもまた楽しみである。

10月5日に行くことになったが、当初3人だったのが、地元の人も入って10人ぐらいの宴会になってしまった。そのうちの1人の講釈をききながらの宴会である。彼氏40歳。蒜山の雑キノコを自ら食べて確かめ、「40種はたべられるタケがある。」という。村の人

彼にタケをもちこんで選別してもらおうとのこと。

「このおやじは城(キノコがよく出るところ)をよく知っているからな。」どうも自分の城は絶対他人には教えないらしい。講釈した彼氏も旅館のおやじの城が知りたそうだった。

それはそうと肝心のタケであるが……。

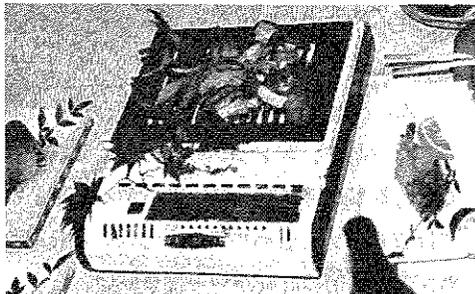
香茸 — 笠の直径15cmぐらいの黒っぽい茸だがからしあえ、焼物にすると強烈な香がして、味ともども何とも……。干し物にして祝い言に出すという珍しいものらしい。2~3本一気に食べたが、アクの強さに舌がしびれた。

1本シメジ — 普通スーパーで売っているシメジは栽培ものをかたまりて扱っているが、ここでは松茸のような大きさに1本1本とれる自生のもの。「香り松茸味シメジ」というけど、香り、味とも松茸など敵ではない。

紫かつぎ — 本当の名前はわすれたが、大ぶり、つるんとした感じが煮物にびったり、などなどのタケが出た。これらの茸は周辺(1000m程度)の中腹以上にあるらしく、山に登って、山を上からみないで、斜めに見上げて進んでとるのだとおやじはいう。

それから「麦むし」も忘れず出してくれた。鯛の腹わたを抜いて、小骨をとり、かわりに麦を入れて、うす味つけてむしたもの。「骨までしゃぶる」ということばがあるが、まさしくしゃぶりたい好物。

キノコ料理



文章かきながらなんとも味がよみがえってくる。今年は年末までは忘れられないだろう。保存しているキノコはあるが、今年のキノコ

の季節は終わった。来年はまた別のタケにも合えるだろう。楽しみである。(ふじた たけひこ)

旧刊新刊書評紹介

「リゾートビジネス」

—リゾートをする人を見る事をビジネスにした本—

大谷 毅 著 日経
尾関 利勝

リゾート分析の原点を人の観察に置く

リゾート計画論や事業論はたくさん見掛けるが、リゾート人間をこれ程観察した本はまず無いだろう。読後感は、“リゾートビジネスの原点はここにあり”と痛感させられた。この本の特徴は著者の足と目で稼いだ確実かつ豊富なオリジナルデータと独善的かつ客観的とも言える感性に基づいた判断に満ちあふれ、これに基づく豊富なさし絵がこの本を一層面白くしている。従ってこの本の紹介は内容は皆さんに読んで頂くとして、勝手な感想を述べて紹介に替えようと思う。

だれのためのリゾートか

多くのリゾート計画はたいがい地域の活性化などが主眼になっていて、地域の所得をいかに向上するかが計画の原点に成っていると思われる。そこでだれがどんなリゾートライフを楽しむかという筋書が一応書かれているが、しかし計画する側がほとんど勝手な願望で描いたものであって、マーケットの対象者の志向などほとんど知らず、意識もしていない。こんな計画ではほとんどのリゾート計画は失敗すると確信がもてる。

どんな計画でも冷静に考えれば当たり前のことだけれど、エンドユーザーの立場にたって考える事が常に計画の原点にある事を忘れては成らないと改めて思い直した。取らぬたぬきの皮算用の計画がやっぱり多い。

身近な所も含めて要注意と申し上げたい。

リゾート形成史を踏まえた現象分析

この本の始めに軽井沢を中心とした日本におけるリゾート地形成とその発展の歴史が簡単にまとめてある。この歴史的な流れを前提としながら、タレント、あるいは、ブランド、トリッキーなどの階層分析と彼等の持ち物、リゾート行動、消費行動、交流行動そしてそれらへの消費額を細かく観察・分析している。リゾートに目が血走っておられる方々は是非この本を一読されたい。もし何も感じる事が無ければあなたは相当時代の感性からはづれた非リゾート人間であるが、手前勝手なりリゾート計画病に掛っておられるのだろう。

(おぜき としかつ)



地域計画への人間的視角

鷹谷義光評論遺稿集
糸乗 貞喜

これは書評ではないし、ここに取上げさせてもらうのは適切ではないかもしれない。

去年の秋ぐち頃だったか、誰かと神戸で話しているとき、「鷹谷さんがもう亡くなってしまっている」という前提で話が進み、気分が泡立って困った。泡立つ心をおさえるには事実を確認しなければならないが、誰にでも聞ける話ではなく、たしかめるまで暫く時間がかかった。

鷹谷さんとは特に親しかったわけではないが、たまに合うと、地域計画にかかわる人間としての会話があった。内容は、刀をぬいてわたり合うほど親密でも対立的でもなかったが、鞘当てをするほどうしろ向きでもなく、脇差の柄を当てるぐらいなやりとりで議論をした。「計画をつくるのか、計画書をつくるのか」とか、「過去の過程が歴史で、未来のプロセスを想定することが計画だ」、「計画は文書ではなく、計画づくりの過程に本質がある」、「本体があいまいな計画はありえない」……など、けっこうやり合ったものであった。亡くなられた話をたしかめて、内心忸怩たるものがあった。

気がついてから、それまで送っていた節季の挨拶やこのニュースレターも取りやめにした。鷹谷さんにまつわる人間のことが奥様に送られてくるのはまずいーと思ったからである。

ところがこの8月、「生前より地域計画にとっても興味があったのか、遺品の中より原稿が出てまいりましたので、未完成のものでしようが、鷹谷の夢であった、本にするといった夢を思い出し……遺稿集としてまとめ

てみました……」という手紙とともに送られてきた。開いてみると、生前議論していた言葉のはしほしがそこにあった。早速、所内でコピーをとり、若い人たちが、地域計画とたずさわる者の縁として読ませていただいている。

この稿は、はじめにおことわりしているように書評ではない。しかし内容の紹介はしなければならない。目次の一部を記してそれに代えたいと思う。

I 地域計画づくり試論

- 1 日本における計画の特徴
- 2 計画策定上の留意点

(中略)

9 計画づくりでおかす誤り

- (1) 目的と手段の混同
- (2) 現実からの逃避(理論だおれ)
- (3) 誰が実行するのか(他人ごと)
- (4) 段階的思考の欠除
- (5) 歴史的発展過程(祖先の集積)を尊重しない
- (6) 日常生活文化の価値を見失う
- (7) 新しいがり屋
- (8) 機能のもつ多面性を忘れる

(以下略)

鷹谷さんの気持はこの「計画づくりでおかす誤り」の項目を見ていただくとわかると思う。こういうことを、ヤンチャ顔で、ちょっとシニカルな口調でしゃべっていた鷹谷さんを思い出さず、合掌。(いとりのり さだよし) <追記>このほかに「地域づくりのこころ・素光」というエッセイ集もお送りいただいた。当編集部へ連絡下されればコピーをお送りさせていただきます。

まちかど

ビジネス街のオアシス

伊集院 豊磨

事務所を天神に移して約1年になります。夏のある日、街路樹の下を歩いていると、蟬しぐれに出会い、行きかう人に夏の季節を十分に味わわせてくれる一角があります。“どうして、ここだけ蟬の声がするのかわ、と疑問に思っあたりを見まわすと、そこに天満宮がありました。ビルの谷間の境内には大きい木が数本あり、その根本はしめりけのあるこけが生えており、蟬の絶好の住処となっていました。どうやら夏の到来を告げてくれる蟬は、ここで長い眠りについていたようです。

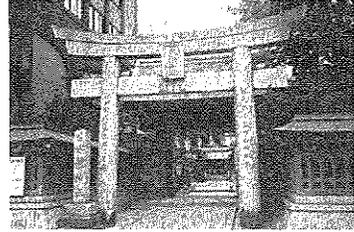
この水鏡天神は菅原道真が大宰府に赴任の途中、四十川の清流で水鏡した故事によってその河岸に社殿が建てられ、江戸時代初期に現在地に移され、天神の地名はこの神社にちなむものと伝えられています。新しく高層のビルが建ち並ぶ天神のビジネス街で貴重なオアシスになっています。(写真1)

また事務所に向い側は、福岡県庁跡地が広々とした空地になっており、先週は交通安全フェア、今週は福岡県ふるさとフェアとフェ

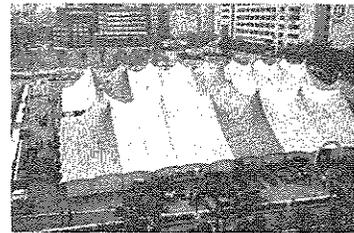
スティバルが続いており、その東隣には福岡県公会堂貴賓館が復元され、一般公開されています。事務所界限の楽しみが増えました。(写真2、3)

(いじゅういん とよまる)

水鏡天満宮



県庁跡地でのふるさとフェア



福岡県公会堂貴賓館



ARPA・K (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	〒600	京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル8階)	TEL (075) 221-5132(代) FAX (075) 256-1764
京都事務所	〒540	大阪市東区石町1丁目1番地 (天満橋千代田ビル2号館)	TEL (06) 942-5732(代) FAX (06) 941-7478
大阪事務所	〒460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル6階)	TEL (052) 962-1224(代) FAX (052) 962-1225
名古屋事務所	〒402	東京都港区芝大門2-3-14 (一松ビル1号館402)	TEL (03) 437-3405(代) FAX (03) 437-3407
東京事務所	〒810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092) 731-7671(代) FAX (092) 731-7673
九州地域計画 研究所			